
探偵と刑事

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
探偵と刑事

【Nコード】
N7691W

【作者名】
桂 ヒナギク

【あらすじ】
人探しの依頼から始まった一つの殺人事件。事件は解決出来るのか？

第1話：人捜し殺人事件

俺の名は黒沢 聡。くろさわ さとし 都内で探偵事務所を経営している。

今日は依頼人が来ている。それは、警視庁捜査一課の荒川 洋子。あらかわ ようこ 警部である。

「で、依頼の内容は？」

「居なくなつた彼氏を捜してほしいの」

「そうか。じゃあその彼氏の名前を教えてくださいませんか？」

「三上 雄一よ」みかみ ゆういち

「写真は？」

洋子は懷から一枚の写真を取り出した。

「これが三上 雄一か」

写真には二枚目の男が写っている。容姿端麗な洋子にはお似合いだ。

「金はあるんだろうね？」

洋子は懷から封筒を取り出した。その中には福沢さんが五十枚入っている。

「取り敢えず前金として五十万用意したわ」

「有り難う。所で、彼氏の搜索願は出てないの？」

「それが……彼、身寄りが居なくて」

「そうか。取り敢えず、彼の家に行ってみよう。何か手掛かりが掴めるかも知れないしな」

「行ってみようって、私も一緒？」

「当然。だから道案内してくれ」

俺はそう言つと、出掛ける仕度をし、洋子と共に事務所を出た。

俺と洋子は三上 雄一の住むアパートにやってきた。部屋の鍵は大家さんに事情を説明して開けて貰つた。

「さて、手掛かりになるものは……と」
俺は室内を調べた。

見つかったのは旅行のパンフレット。

「雄一さんはどこか行く予定でもあったのかな？」

「そう言えば京都へ行くって言ってたわ」

「パンフレットも京都のこと書いてあるし、そこへ行ったのかもな」

「でも京都行くなって言ったの、半月前よ」

「戻ってくる気が無いんじゃないか？」

「でも家具とかそのままよ？」

「取り敢えず、京都へ行ってみよう」

俺と洋子は東京駅から新幹線で京都に向かった。

京都に着いた俺たち。

腕時計を見るとお昼を回っていた。

「洋子、何か食べようか」

「そうね。ちようどお腹空いてきたし」

「何食べる？」

「何でもいいわ」

「じゃあそこにラーメン屋があるからラーメンね」

俺と洋子はラーメン屋に入った。

「らっしやい！」

店員の挨拶。

俺と洋子は席に着く。

「チャーシュー麺二つ」

「はいよ！」

チャーシュー麺が出来上がり、席に運ばれてくる。

「あ、ちよつといいですか？」

「はいよ？」

「この男性って見たことあります？」

俺は店員に雄一の写真を見せた。

「いや、見たことないよ」

「そうですか」

俺は写真を仕舞うと、箸を取ってラーメンを食べた。

食事が終わり、会計を済ませて店を出る俺と洋子。

「洋子、京都府警に寄ってもいいか？」

「どうして？」

「嫌な予感がするんだ」

「貴方の勘って当たるから怖いのよね」

俺と洋子は府警本部に向かった。

府警本部受付。

「すいません、刑事課はどちらでしょう？」

「二階になります」

「どうも」

俺と洋子は二階に上がって刑事課を訪ねた。

「すいませーん」

「はい」

刑事がやってくる。

「何でしょうか？」

「あの、この男性を知りませんか？」

写真を見せた。

「この人は！？」

刑事は写真を手に取り、ホワイトボードの前に移動し、それに貼つてある写真と見比べると、すぐさま俺たちの所へ戻ってきた。

「貴方たち、この人の知り合いですか？」

「はい。半月前から行方が分からなくなってる……」

「そうですか」

「あの、先程の様子からすると、何らかの事件が起こってると思う

のですが？」

「ああ、実は遺体の身元が不明で困っていたんですよ。そこへあなた方が来たもので……。それで、この人の名前は？」

「三上 雄一っす」

「彼は、雄一は殺されたんですか？」

「それは今調べてる最中です。それより、遺体の確認をお願いしてもよろしいでしょうか？」

俺たちは頷き、死体安置所に案内された。

刑事が遺体の顔に被せられた布を外す。

「雄一！」

洋子が遺体を見つめる。

嫌な予感は的中した。

「洋子……」

「一体、誰がこんなことを……」

「洋子、犯人捕まえよう」

「あの、あなた方は一体……？」

刑事の疑問に、洋子は警察手帳を出した。

「警視庁捜査一課の荒川です」

「これはご苦労様です」

「自分は探偵の黒沢です」

「どうして探偵が捜査を？」

「いや、自分は三上 雄一を捜してくれと荒川に依頼されたから捜してただけです」

「そうでしたか」

「それより遺体の発見場所は？」

「近くの空き地です」

「洋子、行こうか」

「うん」

俺と洋子は遺体の発見場所である空き地へと向かった。

「ここが現場か……」

府警の話では、雄一は腹部を刺されて死んでいたという。

現場には争った痕跡がないので、別の場所で殺されて運ばれてきたのだろうという見解だ。

「手掛かりになるものは……」

一応、現場を調べてみたが、めぼしいものは無かった。

「府警に戻ろう。最後に会った人を捜すんだ」

「そうね」

俺たちは府警に戻り、鑑識課を訪ねた。

「どんなご用でしょうか？」

鑑識課の人が質問する。

洋子は警察手帳を見せてから言った。

「警視庁の荒川です。三上 雄一の所持品を見せて貰えますか？」

「本庁の？ ちょっと待ってて下さい」

職員は雄一の所持品を用意した。

「洋子、雄一って携帯持っていないの？」

「持っていないわ」

「それじゃ足取り追えないな」

「自宅の電話の通話記録調べてみるってのはどうかしら？」

「洋子、東京に戻ろう」

「うん」

俺と洋子は京都駅から新幹線で東京に戻り、雄一の自宅の電話の通話記録を調べるため、電話会社へと向かった。

「これが通話記録になります」

職員が通話記録を印刷した紙を渡してきた。

俺は通話記録の頭の電話番号に電話を掛けた。

「はい」

相手が応答する。女性だった。

「三上 雄一をご存知ですよね？」

「貴方、誰？」

「私は都内で探偵をやってる黒沢と申します。雄一さんのことでお

話したいことがあるので今から会えませんか？」

『構いませんよ。どこで待ち合わせますか？』

「貴方のお家の住所を教えて頂けますか？　これからお伺いしようと思います」

俺は女性から住所を聞いた。

電話を切り、洋子と共に女性の家に向かった。

ピンポン　とチャイムを鳴らすと、中から若い女性が出て来た。

「先程お電話した黒沢です」

「どうぞ」

俺たちは中に入り、リビングへ通された。

「話って何でしょうか？」

「実は雄一さんが京都で亡くなりましてね、それで真相を調べているんです」

「三上さん、殺されたんですか？」

「ええ」

「いつ？」

「半月前ほど前です」

「半月前と言ったら、私が三上さんと京都に行ったころですね」

「京都にはどのような」

「旅行です。あの日はホテルに泊まって、翌朝は三上さんが先に出ていかれました。何でも、誰かと会うというようなことを……」

「そうですか。所で、貴方のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、申し遅れました。佐藤　佐和子と申します」

「佐藤さん、雄一とはどういう関係なんですか？」

洋子が佐藤　佐和子に訊ねる。

「ただのお友達です」

「よかった」

「はい？」

「何でもないです」

「佐藤さん、雄一と泊まった旅館の名前を教えてください。」

「京都旅館です」

「洋子、お暇いとましようか？」

俺と洋子は佐和子の家を後にした。

俺と洋子は京都旅館に来ていた。

警備室で監視カメラの映像を見ている。

すると、雄一が部屋から出て来て向かいの部屋に入り、入れ替わりに大きな荷物を持った冴えない男が出て来た。

「洋子、行ってみよう」

俺と洋子は男の出て来た部屋へと行き、中の様子を確認した。
ソファに血痕が付着している。

恐らく雄一はここで殺害され、監視カメラに映っていた男に空き地へと運ばれたのだろう。

俺と洋子は警備室に戻り、監視カメラの映像の男が映っているシーンを印刷してもらい、それを府警に持って行き、事件の担当刑事に渡した。

「こいつが犯人なのか？」

「恐らくは……」

「分かりました。この男を捜して事情聴取します」

俺と洋子は府警を後に、東京へと戻った。

その後、京都府警の捜査で男が見つかり、その男が犯行を認めて逮捕されたという。

第2話：復讐の殺人

千代田区の住宅街にある小さな公園で女性の遺体が発見された。

俺は洋子に電話で呼び出され、現場へとやってきた。

遺体の首には絞められた痕と吉川線があった。そのことから被害者は絞殺であることが分かる。死亡推定時刻は昨夜十時前後だ。

「荒川警部！」

洋子の部下が彼女を呼ぶ。

「周辺で聞き込みをしたところ、昨夜に男女が言い争ってるのを目撃したという人が居ました」

「ご苦労様」

「洋子、被害者の名前、何ていうの？」

「笹本 秋子。ささもと あきこ角山書店に勤務してるわ」

「じゃあそこへ行こう」

「うん」

俺と洋子は車で角山書店へと向かう。

「洋子、好きな人は出来た？」

「何よ、藪から棒に？」

「出来たかどうか教えてくれ」

「出来てないわ。それに同じ目に遭うのは嫌だから彼氏も作るつもりはないわ」

「そうか」

と、そんな話を話している間に車は角山書店に到着した。

俺と洋子は車を降り、角山書店へ入る。

職員の一人が俺たちに気付いてこちらへやってきた。

「どういったご用でしょうか？」

洋子は警察手帳を見せる。

「警察？ 何か遭ったんですか？」

「笹本 秋子さんが何者かに殺害されました」

「何ですって!？」

職員の感嘆の声に、他の職員たちが一斉にこちらを振り向く。

「一体、誰に殺されたんですか？」

「まだ分かりません」

「そうですか……。ああ、僕、後藤ごとうと言います」

「では後藤さん。笹本さんに何か変わったことはありませんでしたか？　どんなことでも結構です。教えて下さい」

「うーん……これといって特に……」

「そうですか。では、後藤さんは昨夜の十時前後、どこにいらっしやいましたか？」

「アリバイってやつですね？　その時間は家で寝てましたよ。生憎、証明することは出来ませんけど」

「そうですか。有り難う御座います。では」

俺と洋子は角山書店を出て車に乗った。

「さて、どうしようか？」

「昨日の夜、喧嘩してたっていう男女を捜そうよ」

「見つかるかな？」

「それを言っちゃおしまいよ」

「よし、じゃあ捜そう」

その時、洋子の携帯電話が鳴った。

「荒川です」

応答する洋子。

「……それ本当？　……分かったわ。行ってくる」

電話を切る洋子。

「どうした？」

「昨夜、喧嘩してた男女の男の方が見つかったって。名前は小宮山こみやま博司ひろし。今から行くわ」

洋子は車を発進させた。

千代田の住宅街に小宮山の家はあった。

洋子がインターホンを鳴らす。

小宮山と思しき男が出て来て訊く。

「どちら様？」

洋子が小宮山に警察手帳を見せると、小宮山は慌てた様子でドアを閉めようとしたが、俺がドアに足を挟んで全開した。

「小宮山さん、何かやったんですか？」

「すみません、万引きやりました」

「そう。それより、笹本 秋子さんをご存知でしょうか？」

「え、万引きの捜査じゃないの？」

「違います。今は殺人事件の捜査をしています」

「殺人！？ 僕は関係ないですよ！」

「小宮山さん、貴方、昨日の夜、女性と喧嘩されてますよね？」

「喧嘩はしてないですよ。別れ話をしてただけです」

「相手は笹本 秋子さんですか？」

「誰ですか、それ？」

俺と洋子は顔を見合わせる。

「シロ？」

「だろうね」

俺は小宮山の方を向く。

「お時間取らせてしまつてすみませんでした。万引きについては後日、警察の事情聴取があるでしょう。では」

俺と洋子は踵を返し、小宮山の家を後にした。

笹本家。

インターホンを鳴らすと、中から四、五十代の女性が出て来た。

きつと、笹本 秋子の母だろう。

「警視庁の荒川と申します」

と、洋子が警察手帳を見せる。

「秋子さんの件でちょっとだけお話を聞かせて頂けませんか？」

「どうぞ、お上がり下さい」

家が上がった俺と洋子はリビングへ案内され、ソファに腰掛けた。向かい側には笹本が座る。

「早速ですが、秋子さんには付き合っている男性は居るんでしょうか？」

「今は居ません」

「今は、ということとは、以前はいらっしゃったということですか？」

「はい。一年ほどでしたが……」

「では、その元彼の名前と住所を教えてくださいませんか？」

「赤山 あかやま たつひこ 達彦という名前です。住所は分かりません」

「有り難う御座います」

会釈する俺。

「洋子、行くぞ」

俺と洋子は笹本の家を出て、車に乗って役所に行き、そこで赤山達彦の住所を教えてもらい、赤山の家に向かう。

赤山の家は練馬区の住宅街にあった。

俺がインターホンを鳴らすと、赤山 達彦が出て来た。

洋子が赤山に警察手帳を見せる。

「警察が何の用ですか？」

「笹本 秋子さんが殺害されました」

「何ですって!？」

「赤山さん、貴方、笹本さんと付き合っていたそうですね」

「ええ、少しの間……」

「別れる原因になったのは何でしょう？」

「秋子に他に好きな人が出来たんですよ。それで別れたんです」

「そうですか。では、昨夜の十時前後、どちらに居おられましたか？」

「刑事さん、まさか俺を疑ってるんですか？」

「いえ、形式的なもので……」

「その時間なら、俺はコンビニに買い物へ行っていました」

「それを証明することは出来ますか？」

赤山はポケットからコンビニのレシートを取り出す。
レシートには二十二時に買ったという記録が書かれている。

「有り難う御座います。では」

俺と洋子は車へと戻った。

「洋子、コンビニの防犯カメラの映像を見せてもらおう」
「分かった」

洋子が車を発進させ、俺たちはコンビニへとやってきた。
「いらっしやいませ！」

洋子は店員に警察手帳を見せた。

「警視庁の荒川です。昨夜の防犯カメラの映像を見させて頂けませんか？」

「分かりました。こちらです」

事務室に案内される俺と洋子。

「何時ごろの映像を見られますか？」

「二十二時」

店員がテープを再生させると、モニターに店内の様子が映し出された。

時刻が二十二時になり、後藤が店内に入ってくる。

「洋子！」

「後藤さんね」

「それはそうと、赤山は来ないね」

「でも赤山はレシートを持ってたのよ？ 来る筈よ」

しかし、いくら待っても赤山は来なかった。

「洋子、赤山の所へ行こう」

「そうね」

俺と洋子は車で赤山の家に戻った。

玄関先で赤山と話をする。

「赤山さん、秋子さんを殺したのは貴方ですね？」

「ちよつと聡！？」

「何を言ってるんですか、刑事さん？ 俺にはアリバイが」

「貴方のアリバイなら崩れましたよ。貴方が持っていたレシート……それは、角山書店の後藤さんが買い物をした時に貰ったレシートですよ？ 貴方は秋子さんを殺害後、後藤さんからレシートを譲り受けた。違いますか？」

「そんなの憶測に過ぎない！ 俺を犯人にしたいんなら、証拠を持つてこい！」

「ではレシートを貸して頂けませんか？ レシートに後藤さんの指紋がついてないか調べさせていただきます」

「なっ……！」

赤山はその場に膝をついた。

「秋子の奴、俺の妹を自殺に追いやったんだ！ 全部アイツが悪いんだ！ だから殺してやったんだ！」

「詳しいことは署の方で聞きます」

洋子は赤山に手錠をかけると、彼を車に乗せて警視庁へ向かって行った。

その後、警察の調べで後藤も共犯者だということが判り逮捕されたという。

第3話：フェリー殺人事件

北海道行きのフェリー。その客室の一つに、俺と洋子は居た。
何故こうなったのか、それは遡ること三日^{さかのぼ}前。

黒沢探偵事務所に入ってくる洋子。

「いらつしやい……って、洋子か。何の用？」

「聡、北海道行こう」

「何だよ、いきなり」

「旅行券が当たったのよ。だから一緒に行こうと思って」

「出発は？」

「三日後の朝よ」

「分かった」

と言うことがあり、今に至る。

フェリーはもうすぐで苫小牧に到着する。

俺と洋子は降りる準備をした。

「うわああああ！」

聞こえてくる悲鳴。隣の部屋からだった。

「洋子、行ってみようか？」

「嫌な予感でもするの？」

「少しだけね」

俺と洋子は隣の部屋の前に移動した。

「何が遭ったんですか？」

腰を抜かした男性が部屋の奥を指差した。

「あ……あれ……」

俺と洋子は部屋の奥を見た。そこには女性の刺殺体があった。

俺は遺体に近づき振れた。

「亡くなったばかりだな」

男性の下に戻る俺。

「被害者の名前、教えて頂けますか？」

「聡美。僕の妻です」

「貴方のお名前は？」

「九条 剛つよしです」

「では、九条さん、発見当時の状況を教えてくださいませんか？」

「貴方、何なんですか？ 警察でもないのに」

洋子が九条に警察手帳を見せる。

「警視庁捜査一課の荒川です。訊かれたことに答えて下さい」

「あ、本物の警察なんだ」

「九条さん、発見当時の状況を教えてください」

「僕が自販機でジュースを買って戻ってきた時でした。ドアを開けると、妻が血を流して倒れていたんです」

九条の足下には缶ジュースが転がっている。

「洋子、俺は現場を調べるから、お前は船員に接岸しても出入り口を開けないように頼んできてくれ」

「分かったわ」

洋子は駆け足で去っていった。

「九条さん、知り合いは乗ってませんか？」

「いえ、乗ってません」

「そうですか」

俺は現場を調べることにした。

被害者は腹部を刺され死亡。死亡推定時刻は午後一時前後。部屋に凶器は見当たらない。犯人が持ち去ったのだろう。

「聡、頼んできたわ」

と、戻ってきた洋子。

「道警に通報は？」

「それも済ませたわ」

「そうか」

俺は部屋を出た。

「九条さん、警察の捜査が終わるまで部屋には入らないで下さいね」
「分かりました」

「洋子、道警が来るまでに犯人見つけとこう」

「とか言いながら手柄を独り占めしたいだけなんじゃない？」

「あ、バレた？」

「やっぱそうなんだ」

「そんなことより捜査」

「何から始めればいいのかしら？」

「俺は九条に向く。」

「九条さん、お住まいはどちらです？」

「北海道ですけど、何か？」

「本州にはどんなご用で？」

「旅行ですよ」

「その時、誰かとトラブルを起こしたとか？」

「ありませんよ、そんなこと」

「そうですか……」

犯人は間違いなくこの男。しかし証拠が無い。

「洋子、凶器がどこかに捨てられていないか探してきてくれ」

「分かったわ」

洋子は凶器を探しにいった。

「九条さん、聡美さんを殺害したのは貴方ですね？」

「なっ、何をバカな！」

「貴方は部屋で聡美さんを殺害後、部屋を出て自販機で缶ジュースを買って戻った。そして悲鳴をあげたんです」

「証拠はあるんですか！？ 僕が殺したと言う決定的な証拠が！」

「残念ながら今はありません」

「憶測で人を犯人にするのか、警察つてのは！？」

「あ、僕は警察じゃありません。探偵です」

「どっちだっていいだろ！ 兎に角、僕を犯人にしたければ証拠を持ってこい！」

「聡、あつたわよ！」

洋子が凶器と思しきナイフを持って駆けてきた。

「この凶器に貴方の指紋がついてるか調べても構いませんか？」
「好きにしる。どうせ僕の指紋は出ないさ。僕は殺してないんだからな」

「分かりました。ではそうさせていただきます」

俺は洋子を連れて部屋へ戻った。

「犯人、彼で間違いないの？」

「間違いない」

「でも彼、余裕そうだったわ」

「大方、手袋でもして犯行に及んだんだろう？」

「違ったらどうするのよ？」

「その時は探偵を辞めるよ。それより道警が来たら起こしてくれ」
俺はそう言つとベッドに横になった。

「……とし、聡！」

目を開けると、洋子の顔があつた。

「道警が来たわ」

「凶器は？」

「渡したわ。今、鑑識が指紋を調べてる」

コンコンというノックの音とともに小太りの男が入ってきた。

「荒川さん、指紋は出ませんでした」

「手袋痕こんは？」

「ありました」

「有り難う御座います」

俺と洋子は部屋を出た。

九条が居ない……。

「洋子、九条さんは？」

「部屋よ。遺体も運んだからいいかなって思つて」

俺と洋子は九条の部屋に入った。

「九条さん、凶器のナイフから貴方の指紋が出ました」

「そんなバカな！ 僕は手袋……！」

「手袋をしてたんですか？」 九条は肩を竦めた。

「仕方が無かったんだ……」

「一体何が遭ったんですか？」

「聡美の奴、不倫してたんだ。だから殺してやったんだ！ 本当は本州で殺す予定でした……。だけど、なかなか出来なくて……」

そこへ入ってくる道警の刑事。

刑事は九条に手錠をかけて連れて行った。

第4話：ラーメン評論家殺人事件

北海道苫小牧市の路上。

俺と洋子は車で函館に向かっていた。

「洋子、腹減らない？」

「そう言えば、お昼まだだったわね。何食べる？」

「あ、そこにラーメン屋がある」

俺たちはラーメン屋の駐車場に車を止めて中に入った。

「いらっしやい！ 何にします？」

「チャーシュー麺二つ」

「はいよ！」

俺と洋子は席に着く。

チャーシュー麺が出来上がり、席へ運ばれてきて、俺と洋子は食べ始めた。

その時、後ろの席で男性が苦しみだした。

「うつ……うつ……！」

床に倒れる男性。

「どうした？」

男性の友人らしき男、香取^{かとり} 悠輔^{ゆうすけ}が男性を揺さぶる。

「お客様、どうなさいました？」

店員が心配そうに男性を見つめる。

俺は男性に歩み寄った。

男性の口元からアーモンド臭。男性は既に死亡していた。

「店員さん、百十番お願いします」

店員は店の奥へと入っていった。

それから暫くして、北海道警察苫小牧署の捜査員たちがやってきた。

「みなさん、遺体には振れてないでしょうな？」

俺が遺体に振れていた。

「ちょっと貴方、何してるんですか？」

俺は無言のまま遺体の所持品を引っ張り出し、その中の免許証を確認した。

「被害者の名は高柳 浩三、たかなぎ こうぞう三十五歳。死因は毒物によるものだと思います」

「あのね、君！」

俺は振り返り、目の前の刑事に返答した。

「何ですか？」

「何ですか？ じゃない！ 遺体に振れるなど言ってるんだ！」

洋子が刑事の肩を叩く。

「何！？」

振り返る刑事。

洋子は懷から警察手帳を出して刑事に見せた。

「警視庁の荒川と申します」

「これはこれは！ 大変失礼致しました！」

刑事は敬礼の後、俺に向き直った。

「貴方も刑事なんですか？」

「いや、僕は探偵の黒沢 聡です」

「黒沢 聡って、あの有名な！？」

「ええ、そうです」

「会えて嬉しいです。実は私、ファンなんですよ」

「そんな事より、事件の捜査はいいんですか？」

「ああ、そうでした」

刑事は遺体を調べ始めた。

「毒殺か……」

刑事は香取に話を訊く。

「被害者とはどういう関係で？」

「お友達ですよ」

「お仕事は何をされてる方だったんですか？」

「ラーメン評論家ですよ。辛口評論で有名でしたよ。彼の評論で潰

れた店もあるとか」

「成る程。となると、恨みを買ってる人物は多いでしょうね」

刑事は踵を返し、

「名取、害者の交友関係洗うぞ」

と、部下の刑事と共に去っていった。

俺は香取に話を聞く。

「あのー、さっき言ってた店を潰されたってやつなんだけど……」

「ああ、その店員さんの父親ですよ」

俺は店員に向く。

「そうなんですか？」

「ええ、そうです。だからって私は殺しちゃいませんよ？」

しかし容疑者は店員と香取の二名。殺せるのはこの二人しか居ない……。

「洋子、警察署行こう。何か進展があるかも」

「分かったわ」

俺は店員に代金を払い、洋子と共に店を出て車に乗り、警察署へと向かった。

苫小牧署の刑事課では、捜査会議が行われていた。

俺と洋子は捜査会議が終わると同時に中へ入った。

「すみません」

「はい、何でしょう？」

一人の刑事が返答する。

「警視庁の荒川です。高柳 浩三の件でお話を聞かせて頂けませんか？」

そう言っ警察手帳を見せる洋子。

「ご苦労様です」

刑事は立ち上がり、ホワイトボードの前に移動した。俺と洋子もそれに続く。

ホワイトボードには被害者とその知人の写真が貼られていた。その中には当然、香取 悠輔の名もある。

「被害者の評論で店が潰れた方はどなたです？」

「この方です」

刑事が指で示したのは、佐山 敬一郎だ。

苦小牧署の捜査員が佐山の所へ向かったところ、佐山は既に他界していたという。自殺らしい。

「佐山さんの自殺の動機は何です？」

「店を潰されたことですね」

「佐山さんにはお子さんって居るんですか？」

「事件の遭ったラーメン屋の店長です」

「名前は？」

「誠一せいいちです」

「たぶん佐山 誠一が犯人ね」

「洋子、何でそう思うの？」

「だって、店を潰され自殺って、十分殺害の動機になるじゃない」

「だからってそいつが犯人とは限らないだろ？」

「そう言う聡は誰が犯人だと思ってるの？」

「まだ分からない」

本当のところ、香取 悠輔を疑っている。

「香取には兄弟とか居るんですか？」

「姉が一人居ますね」

「姉の名は？」

「佐山 香奈子かなこ、敬一郎の妻です」

これで繋がったな。

「洋子、犯人が判った」

「え、本当？」

「香取 悠輔の所へ行こう」

俺と洋子はラーメン屋へと戻った。

「あなた方は？」

刑事がそう訊ねると、洋子が警察手帳を出した。

「香取さんはどちらにいらつしゃいます？」

「香取さんなら帰られましたよ」

「香取さんの現住所を教えて頂けませんか？」

俺と洋子は香取の住所を教わり、その場所へと向かった。

ピンポンとインターホンを鳴らす。

「はい」

香取が出て来る。

「高柳 浩三さんを殺害したのは貴方ですね？」

「はあ？ ちよつと待って下さい。いきなり何なんですか？」

洋子が香取に警察手帳を見せる。

「なっ……警察！？ 何の用ですか？」

「佐山 敬一郎……貴方のお義兄さんにいですね」

「え？」

「佐山 敬一郎は高柳 浩三の評論により店を潰され、自殺をなさっています。貴方はその仕返しに高柳 浩三を毒殺したのです」

「何をバカなことを。第一、青酸カリはどこにあるんですか？ 俺が犯人なら持つてる筈でしょ？」

その問いに俺はニヤリと笑みを浮かべた。

「何が可笑しいんですか？」

「どうして青酸カリだと？」

「しまっ……」

「もう遅いですよ、香取さん」

「そうさ。あんたの言うとおりさ。あいつが義兄さんを自殺に追いやったから殺してやったんだ！ 青酸カリは姉さんが用意したものだ」

「そうですか。詳しい事情は署の方で。ご同行して頂けますね？」

「はい……」

俺と洋子は香取を車で苫小牧署まで連行した。

その後、香取は刑事の取り調べで犯行の全てを認め、逮捕され、

姉の方も殺人幫助の罪で書類送検されたと言う。

第5話：これって密室殺人？

本州。

北海道旅行が終わり、俺と洋子は東京に戻っていた。

黒沢探偵事務所のドアが開き、洋子が中へ入ってくる。

「洋子か。今日は何の用だ？」

「聡、難事件よ」

「難事件？ どんな事件なんだ？」

「千代田区のマンションで起きた事件なんだけど、被害者は男性で背中にナイフが刺さってたの。発見当時、部屋の鍵は全て掛かっていて、鍵は遺体のポケットに入っていたわ」

「密室殺人か……。洋子、取り敢えず現場まで案内してくれ」

俺は洋子と共に事件のあったマンションへ行き、現場の部屋を調べた。

遺体はリビングで俯せの状態で見られ、背中には先の通りナイフが刺さっていた。俺は遺体が倒れていた場所を調べ、凹みで箇所を見つけた。

「洋子、この凹みは何だろう？」

「どれ？」

洋子が床の凹みを見る。

「何かしらね」

「洋子、発見当時、妙なことはなかった？」

「そういえば……暖房がついてたわ。夏なのに何でかしら？」
成る程。

「洋子、これは自殺だよ」

「自殺？」

「そう。床にナイフのついた氷を置き、その上に仰向けでダイブして自分の背中にナイフを刺したんだ。これがその証拠だよ」

俺は不自然な位置に立っている椅子を示した。

「飛び込む時はこの椅子を使ったんだ。床の凹みは着地の衝撃で出来たもの。暖房がついていたのは、早く氷を溶かす為だと思う」

「成る程。じゃあこの事件は自殺で書類送検するわ」

俺と洋子は部屋を出た。

「じゃあ俺はこれで」

俺は洋子と別れ、帰路に就いた。

第6話：狙われた刑事（前編）

黒沢探偵事務所。

俺は椅子に座って新聞を読んでいた。

コンコン、とドアがノックされる。

「黒沢さん、警察です！」

俺は新聞を置き、ドアの前に移動して開けた。

二人組の男が警察手帳を見せる。

「練馬署の者です。貴方に殺人容疑で逮捕状が出てます」

そう言って逮捕状を見せてくる刑事。

「ちよつと待つて！ 何かの間違いでしょう!？」

「話なら署の方で聞きますよ」

俺は刑事に手錠をかけられ、署まで連行され、取調室に入れられてしまった。

「あの……殺人って一体何が遭ったんでしょう？」

刑事が机の上に遺体の写真を置く。

「知りませんよ。誰ですか、この人？」

「山田 徹^{やまだ とほる}。お前が殺った男だ」

「それで、どうして私が容疑者に？」

「死因は後頭部を鈍器で殴られたことによる脳挫傷^{のうそしょう}。凶器は現場に落ちていた金属バット。そしてそのバットにはお前の指紋がついていたんだ」

「私の指紋はどこで入手したんですか？」

「お前、高校時代に傷害でパクられてるだろ？ 前科者リストにあったぞ」

非常に不利な証拠だ。

「否認してもいいですよね？」

「だからって状況が変わる訳ではないぞ。物証があるんだからな」
腹減った。

「それより、カツ丼出して下さい。取り調べと言ったらカツ丼ですよ？」

「出ねえよ！」

「つまんねえ。ところで俺は帰れないの」

「当たり前だろうが！」

そう言って刑事は俺を留置場へと連行した。

「裁判の日までここで暮らしてもらうからな」

そう言って去ろうとする刑事。

「待って下さい」

「何だ？」

「本庁捜査一課の荒川 洋子警部を呼んで頂けませんか？」

「分かった。手配しておこう」

刑事はそう言つと、今度こそ去っていった。

それから一時間が経ち、洋子が留置場にやってきた。

「聡、殺人つて、あんた何やってんのよ？」

「違うんだ！ 俺じゃないんだ！ 頼む、ここから出してくれ！」

「じゃあ、パパのこと話す？」

「義兄さんには迷惑かけられないよ」

その時、先程の刑事が血相を変えてやってきた。

「黒沢さん、申し訳ありません！」

そう言つて扉を開ける刑事。

「黒沢さんも人が悪い。警察庁刑事局長、荒川 あらかわ 和夫 かずお さんの義弟 おとうい さんならそう言つて下さればいいのに」

「言つたつて信じないでしょう？ で、出ていいの？」

「はい」

「じゃあ真犯人突き止めるか。洋子、行くぞ」

「うん」

俺と洋子は留置場を後にし、刑事課へと向かう。

刑事課に來ると、取り調べの刑事が声をかけてきた。

「黒沢さん、先程はご無礼を申し訳ありませんでした」

「そのことなら構いません。それはそうと、事件のことについて説明をお願いしたいのですが……」

「はい。え…… 害者は山田 徹、二十五歳。職業は刑事で、警視庁組織犯罪対策課の課長です」

「洋子、知ってる？」

「知らない」

「遺体の発見現場は？」

「練馬児童公園です」

「凶器についていた指紋は僕のだけですか？」

「そうですね。黒沢さん以外の指紋は検出されませんでした」

「洋子、本庁行くよ」

俺は洋子を連れて警視庁へ向かい、組織犯罪対策課へとお邪魔した。

「どんなご用件で？」

刑事が俺たちに訊ねる。

「山田課長の件でお話を伺いたいのですが……」

「あなた方は？」

その問いに洋子が警察手帳を見せる。

「捜一の荒川です」

「黒沢です」

「ああ、ご苦労様です。しかし、犯人は先程逮捕されたと聞きましたか？」

「その件、実は誤認逮捕だったんですよ」

「誤認逮捕!？」

本当は上からの圧力だが、黙っておく。

「で、真犯人は誰なんです？」

「それを今、調べてるところです」

「そうですね。で、何を話せばいいでしょう？」

「そうですね…… 山田課長の警察以外の交友関係でも聞きましょうか」

「そう言われましても、当方では把握出来ていないので何とも……」
「そうですか。失礼します」

俺と洋子は警視庁を出て、練馬署の刑事課へ戻った。

「ああ、黒沢さん」

「山田課長の携帯電話を見せて頂けませんか？」

「それでしたら、鑑識にあるのでそちらへ行かれてはどうでしょう？」

「洋子、行こう」

俺と洋子は鑑識に向かった。

「すいません、死亡した山田 徹の携帯はありますか？」
鑑識の職員が携帯電話を持ってくる。

「こちらが山田 徹の携帯になります」

俺は携帯を手に取り、着信履歴を開いた。

見覚えのある電話番号が記録されていた。俺が自分の携帯でその番号にかけると、ディスプレイに川島 かわしま みのる 実と表示された。

「はい、川島です」

「黒沢です」

「黒沢って、黒沢 聡か？」

「そうだよ。お前、山田 徹を知ってるよな？」

「知ってるも何も、高校時代のクラスメイトだったじゃないか。旧姓、中沢」

「中沢 徹のこと？」

「ああ、そうだよ。新聞で読んだよ。殺されたんだってな」

「川島、今から会えないか？」

「今から？ 別にいいけど」

「じゃあ、三時に練馬児童公園で」

「分かった」

「おう、待ってるからな」

そう言っただけで俺は電話を切った。

「洋子も行く？」

「いや、私は仕事があるから本庁に戻るわ」
「分かった。じゃあ俺一人で」

俺はそう言つて練馬署を後にて練馬児童公園に向かった。
練馬児童公園に着くと、川島が既に来ていた。

「よう、待った？」

「今来たところ」

「そうか。で、今は何してるんだ？」

「葛飾警察署に勤務してる」

「マジっすか!？」

「マジ」

「あ、それより、中沢のことなんだけど」

「何？」

「中沢と最後に会ったのはいつだ？」

「何でそんなことを聞くんだ？」

「実は俺、中沢殺した犯人に罪着せられて、それで真犯人を暴こう
と思つてな。で、中沢と最後に会ったのはいつだ？」

「一昨日の夜、十時ごろかな」

「その時、怪しい人物とかは？」

「見てないな」

「そうか。悪いな、忙しい中会ってくれて」

「いいつてことよ」

「じゃあ俺は帰るわ」

「ああ、じゃあな」

俺は川島と別れ、帰路に就いた。

黒沢探偵事務所。

俺は椅子に座り、今朝の新聞を見た。しかし、山田 徹の記事は
どこにも無かった。

まさか川島が？ だけど動機が分からない。

俺が新聞を畳んで机に置くと、ドアが開いて洋子が入ってきた。

「洋子、仕事だったんじゃない？」

「終わったから手伝いに来たの」

「そうか。よし、出掛けるぞ」

「どこ行くの？」

「川島の過去を洗い、にな」

「分かったわ」

俺と洋子は事務所を出るのだった。

第7話：狙われた刑事（後編）

俺と洋子は川島の両親が暮らしている一軒家へやってきた。
ピンポンとチャイムを鳴らすと、おばさんが出て来た。

「どちら様ですか？」

洋子が警察手帳を見せる。

「警視庁捜査一課の荒川です。実さんのことでお話を伺えないでしょうか？」

「中へどうぞ」

中に入ると、リビングへ案内された。

俺と洋子はソファに腰掛ける。

おばさんがお茶の用意をした。

「ああ、お構いなく」

「それで、息子の話って何です？」

言いながら向かい側に座るおばさん。

「実はですね、実さんが殺人事件に関与しているんじゃないかという疑いがありまして、それで調べているんです」

「そなた、実が人殺しを！？」

「いや、まだそうと決まった訳じゃないんですが……」

「帰って下さい」

「洋子、お暇しうか」

「そうね」

俺と洋子は川島家を後にする。

「収穫なしたったわね」

「そうだな」

「次、どこ行く？」

「練馬署」

俺と洋子は練馬署へ行き、刑事課へと入った。

「あ、黒沢さん！」

刑事が寄ってくる。

「何ですか？」

「死亡した山田 徹なんです。高校時代に川島 実と言う同級生を虐めていたことが分かりました」

「虐め？」

「当時、担任だった教師がそう証言しています」

殺害の動機は虐めか？

「それから、川島 実と山田 徹は警察学校の同期でもあります」

「有り難う御座います。洋子、葛飾署行くぞ」

俺と洋子は練馬署を後にして葛飾署へとやってきた。

受付で川島の居る課を訊く。

「川島 実は何課ですか？」

受付職員が職員名簿を見る。

「刑事課ですね」

「有り難う」

俺と洋子は刑事課へ行った。

「お、黒沢じゃん。どうしたんだ？」

「山田 徹を殺害した犯人が分かったんだ」

「何？」

「犯人は警察関係者だった」

川島が眉を顰める。^{ひそ}

「犯人は俺の指紋を偽造して金属バットにつけ、それを持って殺害現場へ行き、被害者を電話で呼び出して撲殺したんだ」

「へ、へえ。で、誰が犯人なんだ？」

「それはな……お前だよ、川島 実」

「なっ、何で俺が？ 動機は？」

「お前、高校の時、山田に虐められていた。それが動機だよ」

川島は脱力し、その場に四つん這いになった。

「何で……何でバレちゃったんだろうな……」

「認めるんだな、川島？」

「ああ、そうだよ。俺が殺してやったんだよ。高校の時、散々虐めてきたからな」

「洋子、逮捕だ」

川島は咄嗟に立ち上がり、拳銃を取り出して自分のこめかみに銃口をあてがう。

「やめろ川島！」

だがしかし。

パアンツ！ 銃声と共にその場に倒れる川島。

「そんな……自殺するなんて……」

「川島　っ！」

俺はその場に崩れ、涙した。

第8話：誘拐された刑事

黒沢探偵事務所。

ブルルルル、と鳴り響く電話の呼び出し。

俺は受話器を取った。

「はい、黒沢探偵事務所です」

『荒川 洋子は預かった。返してほしくば一千万用意しろ。また連絡する』

俺は受話器をいったん置くと、再び手に取った。そして百十番通報をした。

それから数分後、部屋のドアが外側からノックされ、俺は開けた。数人の男が同時に警察手帳を見せる。

「練馬署の赤羽です。誘拐の件で来ました」

「あ、どうぞ、お上がり下さい」

刑事たちが中に入ってくる。

一人の刑事が持ち込んだ機材を電話に繋ぐ。きっと逆探知用の機材だろう。

「では黒沢さん、犯人から電話が来したら、落ち着いて話を引き延ばして下さい、その間に我々が逆探知で犯人の居所を特定します」

ブルルルル、と電話が鳴る。

俺は受話器を取って応答した。

「はい、もしもし」

『警察が来てるな』

俺は窓の外を見た。

『今、窓から外を見てるだろ。まあ、それはいいとして、一千万は用意出来たか？』

「その前に洋子の声を聞かせろ」

『いいだろう』

電話の向こうで物音がする。

『聡、助け……っ！？』

洋子は無事だった。

「一千万だな？」

『ああ、そうだ』

「直ぐに用意する。連絡先を覚えてくれないか？」

『080……だ』

俺は犯人の連絡先をメモした。

ブツ、ツーツー 電話が切れる。

「逆探知は出来ましたか？」

「残念ながら……」

「そうですか。身代金はどうすれば？」

「犯人の要求通り用意して下さい」

「分かりました」

俺は机の引き出しから封筒を取り出した。中にはちょうど一千万が。

「その中に一千万が？」

「はい。それより、トイレに行かせてもらってもいいでしょうか？」

「ああ、どうぞ」

俺はトイレに入り、携帯電話を取り出した。

電波はおかしなことに圏外。

俺はメール作成画面を開き、義兄さん宛てのメールを作り、水を流してトイレを出た。

「刑事さん、ビデオカメラをお持ちですか？」

「持ってますが、何に使うんですか？」

「紙幣の通し番号を控えておこうと」

「成る程。では、外の車から持ってきます」

刑事はそう言うと言務所を出て行った。

俺は携帯を取り出し、電波状況を見た。

圏外だったのが、棒が三本立っている。

俺は先程作ったメールを送信した。

ドアが開き、カメラを手に刑事が入ってきた。

俺はカメラを受け取り、録画モードにして机に置き、録画ボタンを押し、一千万を封筒から取り出し、通し番号をパラパラとめくりながら撮影する。

「これでよし」

俺はカメラを止めた。

ブルルルル、と電話が鳴る。

俺は受話器を取った。

『一千万用意出来たみたいだな。それを持って練馬児童公園まで来い』

電話が切れる。

俺は受話器を置いた。

「では、我々は先に行って待機していますね」
刑事たちが事務所を出て行く。

「赤羽さん」

俺は赤羽という刑事を引き止めた。

「何です？」

立ち止まって振り返る赤羽。

俺は机に置いてある新聞を取った。

「一連の誘拐事件の犯人は貴方ですね？」

俺は赤羽に誘拐事件の記事を見せる。

「何を仰っているんですか、僕は警察ですよ？ 大体、何を理由にそんな？」

「逆探知用の機材を持つてるなんて、可笑しいと思ったんですよ。そもそも、映画などにある逆探知装置などというものは現実には存在せず、逆探知は捜査機関の要請により通信事業者が交換機の記録を調べるだけなのです」

「……………」

言葉を失う赤羽。

「赤羽さん、警察庁刑事局長の名前、言えますか？」

赤羽はその場に膝をついた。

「言えませんよ。何で分かつちゃったのかな……？」

「犯行を認めるんですね？」

「一連の誘拐犯は僕たちです」

「洋子はどこに居るんですか？」

「練馬児童公園で解放する手筈になってます」

「そうですか」

コンコン、とドアが叩かれる。

「黒沢さん、警察です！」

俺はドアを開けた。

「誘拐犯はどこです？」

「彼です」

俺は赤羽を示した。

「赤羽と言います」

「赤羽、誘拐の現行犯で逮捕する。他の仲間も捕まえたからな」

「すみませんでした……」

「刑事さん、練馬児童公園に行つて下さい。誘拐犯の仲間がいます」

「分かりました。手配しておきます」

こうして誘拐事件は解決した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7691w/>

探偵と刑事

2011年10月7日03時20分発行